

Y先生の文章

2024. 1. 16

お腹がすいたらコンビニでパンを買う。のどが乾いたらスーパーでジュースを買う。そんな生活とは程遠い、コンビニまで車で40分の町にある男の子が住んでいました。彼の名は「〇〇〇〇」といいました。

彼は、バスで中学校に通っていました。冬になるとバスが路肩にはまり、学校に1時間遅れで登校することもありました。ゲームやYouTubeもないので、休みの日は近くの小学校の校庭で、サッカーや野球、テニスなどをしていました。いろいろなスポーツをやっていたおかげで、中学校の球技大会では大活躍……。と思いきや、足を蹴られて負傷。途中退場した1年生。肋骨にひびが入り、出場できなかった2年生。というような青春でした。中体連では、1年生支部大会優勝。2年生からは、結果が出ず伸び悩み、3年生の最後にバレー部へ転部しました。バレー部では、卓球で鍛えた器用さを生かし、サーブで点数を取る専門として試合に出ていました。

一方、彼の学習面は、英語のみ成績優秀。毎英も欠かさずやっていました。14名の同級生と協力して頑張っていました。住んでいた町も日本で一番雪が降るような山の中。そのような場所で彼が学んだ一番のことは、「人と人との関わることの大切さ」です。誰かと関わることは生きていく中でとても大きな役割を果たします。一人ではできないことも誰かと協力することで、成し遂げることができます。同級生が100名もいる野田中でも、人との関わりは同じように大切です。授業や行事を通して、よりよく関わる方法を学んでいきましょう。

これは、2年生の学年通信「はばたき」に掲載されたY先生の文章である。「私の中学生時代」というシリーズである。Y先生は、2年目の若い教員である。この先生の文章がいい。毎週、週案の反省を見せてもらうが、内容が実によい。いつぞやは、名前を出さずに、職員会議の資料に載せたくらいである。

今回の学年通信の文章も彼らしい。「文は人なり」である。私は、彼が生まれ育った町に2年間住んでいたため、この内容がよくわかる。彼は、私がお世話になった町からの大切な大切な預かりものである。大事に育てて、成長してもらい、故郷に錦を飾ってもらわなければならない。それが私の使命である。彼との出会いには意味がある。

彼は、まわりの先輩方から、よく面倒を見てもらっている。それは、彼の人柄によるところが大きい。教育係の学年主任は、彼から学ぶこともあると、よく言っている。好感がもてる青年である。応援したくなる。期待したくなる。生まれ育った故郷が、町の人々が、彼を育んだことは間違いのない。これからのさらなる彼の成長が楽しみである。